小学校体育授業における教師信念変容の考察

～活動システムモデル図を用いたメンタリングを通して～

濱地　優（横浜国立大学大学院教育学研究科）

１．目的

本研究では，小学校体育授業におけるメンタリングが教師行動と子供の学び及び教師信念変容にどのような影響を与えるのか考察することを目的とする．

２．研究方法

まず，先行研究に倣い信念要素を，体育授業観，教材観，学習者観，指導観，及び学級経営観の５つに分類・定義した．単元前後の授業者への半構造化インタビューに基づき「教師信念カテゴリー」及び「教師信念モデル図」を生成し，授業者の教師信念を分析・考察した．単元の過程では，筆者がメンターとなりメンタリングを実施した．また，活動システムモデル図を用いて授業の省察を行い，教師信念変容の過程を分析・考察した．その他の分析方法を表１に示す．

メンタリング有無での信念変容過程を比較するため，同一教師で２単元分の授業観察を行った．また，メンタリング有無の順序を入れ替えての比較，専門教科との比較，経験年数での比較をするため，計 4 名 9 単元分の実践研究を行った．

表 1　分析の方法

	単元前後	単元途中
教師信念 教師の行動	インタビュー調査 （半構造化インタビュー） 信念概念カテゴリーと 信念モデル図の生成	インタビュー調査 ・メンタリング有り→メンタリング実施 ・メンタリング無し→半構造化インタビュー エピソード記述
子どもの学び	運動有能感調査 診断的・総括的授業評価	形成的授業評価 自由記述分析 エピソード記述

３．結果と考察

1)中堅期教諭Ｂ　メンタリング有りの事例

教諭Ｂにおいて，単元前の教材観は不明瞭なまま単元がスタートした．単元１時間目後，授業者の専門教科である社会科教材観【問題解決的な学習】と関連した発言に対して，メンターの価値づけが行われると，次時からテーマを元にした探究的な活動が行われた．単元後の教材観には，【気づきの楽しさ】【共走の楽しさ】【対象やモノからの働きかけ】カテゴリーが生成された．教材観について，社会科では一貫しており，他方で体育科においては「明確化」させながら授業実践を行っていたと解釈された．また，授業者は子供の学びが生起しない状況に葛藤し，メンタリングにより体育科でジグソー型学習を取り入れた．子供の学びの深まりを感じ，その後，専門教科である社会科でも同じ学習方法の活用が認められ，単元後には両教科で新たな指導観が生成された．中堅期教諭Ｂにおいて，信念要素及び専門教科の信念との「関連化」を図りながら授業実践を行ったと考察された．

2)初任期教諭Ｄ　メンタリング有りの事例

教諭Ｄにおいて，単元前，教材観は生成されず，学年の教員やメンターからの支援により，感覚的な楽しさを味わわせる授業実践を目指す様子が解釈された．しかし，単元の過程において授業者は，技能達成による子供の学びの生起を実感し，【技能獲得】的な教材観の「明確化」が解釈された．一方，【技能獲得】的な授業による学びの停滞も認められた．授業後，子供へのインタビュー映像を示しながら，学びの停滞している状況をメンターが授業者に問いかけた．すると，授業者は自身の実感と対称的な子供の回答に悩みを抱いていると解釈された．単元後は，教材観で「技能獲得」と「跳び箱運動固有の面白さ」との葛藤が認められ，メンタリングでの葛藤場面の創出が，教師信念変容に寄与すると考察された．

４．結論

メンタリング有りの実践において，初任期教諭では，信念要素の「顕在化」が図られ，その後，「明確化」が認められた．中堅期教諭では，教材観を「明確化」させながら，信念要素間また専門教科の信念との「関連化」を図っていたと考察される．また，教師信念変容の過程では，授業者の①悩みや葛藤の生起，②問題場面の解決に，メンターからの価値づけやアドバイスを行うことで，授業者の教師信念変容がなされたと考えられる．

メンタリング無しの実践では，メンターからの働きかけが無いため，中堅期教諭，初任期教諭共に，教材観が「明確化」されにくい傾向が認められ，学びの停滞も解釈された．

活動システムモデル図を用いた振り返りでは，教材観を明確に捉え，同モデル図内の要素を授業場面に置き換えて再構築することで授業改善につながっていくと考えられる．

５．主な参考文献

朝倉雅史(2016)体育教師の学びと成長．学文社．